

秋田で発生するトマト病害

病害の防除対策

AI活用した適期防除も

秋田県のトマト生産であり、6月中旬～10月、鹿角市や大仙市などをはじめ、県内で広く行われている。生産現場の課題として、近年の高温や豪雨の作付面積は223ha、等の影響により、土壌病、書である「青枯病」、「か

いよう病」による被害が拡大しており、収量や品質の低下が問題となっている。また、大規模園芸拠点として、大仙市や湯沢市ではトマトの団地が整備された。生産現場での薬剤防除は定植後7～10日間隔でスケジュール



齋藤主任研究員

生が見え始め、主な病徴として地上部の萎れや葉先の褐変等があり(図1、2)、程度がひどい場合は株が枯死する。圃場で多発した場合は、収穫皆無となる(図3)。主な防除対策は、抵抗性台木の使用や土壌消毒等であるが、複数の防除対策を組み合わせることが被書を抑えるために重要となる。また、かいよう病は種子伝染性病害であり、圃場への病原菌の持ち込みを防ぐため、苗木で本病が発生してしまっ



図1 青枯病による株の萎れ



図2 かいよう病による葉の萎れ、葉先の褐変



図3 青枯病多発圃場

【青枯病とかいよう病に

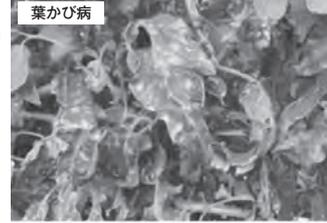
対する防除対策】



灰色かび病



うどんこ病



葉かび病



すすかび病

図4 県内で発生するトマトの主な病害



図5 プランテクトの温度・湿度センサー

るなど、定植しないことが大切である。機械や靴の底への病原菌の付着により、圃場外への持ち出しに注意し、被書が拡大することを防ぐため、農資材の十分な洗浄と消毒を徹底すること等の対策もあわせて行う必要がある。AIが温度・湿度センサ(図5)のモニタリングデータなどを活用でき、薬剤防除にシリアル防除ではなく適期防除を行うことができると、目に見えない病害の感染リスクを予測し、「低」、「中」、「高」実装に向けて現地実証等

秋田県農業試験場生産環境部病害虫チーム主任研究員

齋藤 隆明

除を行う必要がある場合は、おすすめの農薬が表示され、農薬の適切な選択と適期散布に役立つ。予測に基づく防除により、発病を抑制し、薬剤防除回数削減を図ることが可能である。また、新規就農者等の経験の浅い農業者でも、薬剤防除を効果的に行うことができるようになる。

トマトの他に、県内で広く作付されているキュウリについても、プランテクトによる病害予測機能モニタリングサービス